

職人の労働のエートス——象嵌職人の日記から

1 主題と構成

「吾家事の方も僕には非常な責任を負担するやうなつた 本年ハいよいよ父と呼ばれるようなる事であるが養育の責任が生じて来る 又清二には嫁を取つて別家させる事、之又重大なる責任である それ二供なふ費用は非常二大にして僕として背負切れぬ事なるが、どうにかして切抜ねばならぬ 之が最も心配だ 兄と清二への分配金、之も僕が働いて仕拂ねばならず、父は働いて下さるが今では年の勢が以前程精出です あしめる方が無理にてどうしても今後は僕一人の力で全責任を負ふてやつて行かねばならぬ (中略) 其外各展覧會出品や注文品にて仕事は非常二多忙なる事今より知り切つて居る 躰が幾つあつても足りない」。これは、金沢の象嵌職人・米澤弘安（一八八七～一九七二）が、大正八年元旦の日記に記した文である。娘が生れて養育の責任が出る。家を継いだ弘安は、兄と弟に財産分けをしなければならない^①。注文をこなし、家計を支えなければならない。その上で、展覧会に出す作品（美術品、以下同じ）を制作しなければならない。すべて弘安の肩にかかっている。年老いた父はもう当てにできない。弘安は、「躰が幾つあつても足りない」とぼやきつつ、責任全うへの決意を記す。本稿は、近代都市を生きた一職人を事例に、その日記（や面接記録）^②を材料として、労働世界を分析する。課題は三つある。一つ、居職職人・弘安の階層（仕事と生計）を概観すること。以て、労働世界の背景となす。二つ、弘安の労働のエートスを分析すること。弘安の労働には、二つの目的（家業経営と作品制作）があった。それらは、葛藤する理念（目的合理的な世界と価値合理的な世界）をなした。弘安は、それらの達成のために労働に励んだ（倫理としての勤勉）。ここでは、この労働の意味構造をヴェーバーのエートス概念（理念と倫理）を援用するかたちで分析する。三つ、これらの議論を関連する先行研究（通俗道徳論と職人氣質論）と重ね、解釈を膨らませること。以て、それらの先行研究を接合する。本稿は、象嵌職人の労働のエートスに「日本の職人」像の一事例を見るに止まる。最後に、今後の課題として、「日本人の労働のエートス」に至る研究手順を提起する。

2 弘安の階層

米澤弘安

金沢で明治維新後、武士を顧客とした職人は、没落の道を辿った（青木、二〇〇六、一七九頁）。象嵌職人も同じ運命にあった。市による工芸産業の振興策も、効を奏さなかった。大正期、世界貿易により欧米の購買者が開拓され、工芸品が輸出されて、一時活気づいた。弘安もその恩恵を蒙った。しかし昭和に入り、金融恐慌や金属資材の統制で、工芸産業は壊滅の道を辿った。象嵌職人も廃業が相次いだ^③。

米澤家は、代々刀装金具職人であった。祖父清右衛門は（藩の）細工所の職人で、明治には士族授産の銅器会社の職工頭を勤めた。「予カ白銀職八累代ノ業務ニシテ、数代金沢旧藩前田家ノ御

用を冴り武器方等諸細工被申付、私（清右衛門）に至り六代れんめんとして御用相勤メタル」（沿革開業）（田中、一九七四、一四頁）。弘安は米澤家の八代目であった。兄光雪は家を出て名古屋で絵師となり、弟清二は弘安の下請職人になった。弘安は、父清左衛門から象嵌細工を仕込まれた。「…わたしも十二（歳）で学校から帰ってくと、そばに座らかされて兄の仕事と一緒に仕事をさせられた。この仕事は図案があるていどできないとダメながで、兄は絵習いにかよったわけや、ところが絵の方が面白くなって名古屋で絵描きになってしまった。ほんな関係で、わたしが父のあとを継ぐようになったわけです。それからは学校から帰ると、一時間でも二時間でも横に引っぱられてやとったもんで。自分から進んでいたいという気持ちで、やれというもんやさかい仕方なしにやったんです。学校を卒業したのが明治三十年、この年から本格的にやりました」（田中、一九六八、四八～四九頁）。弘安が業界誌に出した広告には、次のようにあった。「金属美術製作所 加賀象眼、彫刻、花瓶、香炉、置物類、其他装身具美術注文ニ応ズ可ク候 金沢市宗叔町三番町 番地 米沢弘保」（大二・一〇・一八）。

仕事と生計

近代に入り、職人は階層分解した（隅谷、一九五五、三七～四一頁）。ある者は、問屋（職商人）や作家になった。ある者は職人に止まり、問屋の注文を請けた（問屋に従属した）。多くの者は、工場で働く職工になった。さらに他の者は零落し、窮民の列に加わった④。（幸運にも）弘安は作家的職人に止まった。弘安は、仕事や顧客の点で職人の上層にあり（青木、二〇〇六、一八〇頁）、金沢で著名な職人や絵師と交流した。顧客には、皇室や旧藩主の前田家、韓国皇帝等がいた。作品は、一九二八年に帝展（帝国美術院展）に入選したのをはじめ、博覧会でたびたび入選した。一九六九年に県無形文化財保持者、一九七二年に文化庁無形文化財保持者になった。弘安は、「当地の金工界で第一人者としてその技術手腕に至ってはまさに棋界の代表的作者たるの貫禄を備えている作家」（『北國新聞』昭三・一〇・一二）と評された。

しかし、米澤家の家計は困窮した。弘安は、煙管や火箸、簪等の生活用具の装飾や修理で収入を得た。その傍ら作品の制作に励んだ。大正（中）期に用具装飾の注文が増えたが、昭和に入り激減した。太平洋戦争時には、戦時経済の貴金属統制（昭和一五年 奢侈品等製造販売制限規則）で、仕事自体が困難になった。戦後も弘安は、象嵌と関係ない手間仕事で凌いだ。「メタルとかね、それから優勝カップとかね、あんながに字彫る。そういう仕事がちよこよこときたんです。一字いくらで、それで彫ったらいくらで計算で、そんなんがきとった。あれですごい助かったです」（娘信子の話、二〇〇九・四・一二）。家業は零細な家内工業で⑤、材料購入の資金に苦労した。時間と資金を要する作品制作は、家計をさらに圧迫した。妻の父（土方）は、裕福な表具師であったが、弘安はしばしば、彼に資金援助を仰いだ。「（今上天皇の成婚奉祝のための献上屏風の制作依頼を受けたが）、全部にて四千円位で出来せられたいと事であった（中略）僕は兎二角、今一應見積して見ると云って、菊の模様の圖案を借りて来ル 土方様へ寄ってこの話をなし、お父様は、一人でやれ、資金等は世話するからと應援の言葉を頂き、色々と御馳走二なって辞し、清二方へ寄って、この話をす」（昭三・二・九）。問屋や同業者に借金もした。「僕は午後五時水辺様へ行く（中略）借金の利子を上けて（返して）来た」（大一二・六・二八）。二階を貸間にもした。「二階の小池田様、今日八朝より来られ、夜初めて泊られた」（大一四・一・一七）。最後は、妻が裁縫で稼いだ。「昭和四年が大恐

慌の時やったけどって、ひどかったって。おばあちゃんが裁縫して、それもってってお金貰ったら買い物してくるって。もってたら、今度の月末にねって言われたって、がくってしてたこともあったねって娘らで話してる」(娘信子の話。二〇〇九・四・一二)。このような事情の中、昭和九年、弘安は、長男の家業後継を断念した。「職人生活の貧乏暮らしは自分一代限りにしたい」(田中、一九七四、九一頁)⑥。長男は商人の道に進んだ(その後戦死した)。

3 弘安のエートス

家業を経営する

藩社会で、細工所の武具職人は扶持米を受けた。細工人は、自ら稼ぐ必要はなく、技能の練磨に専念すればよかった。これが、弘安の祖父の生活であった。しかし明治維新後、細工所は解体し、顧客の武士も消滅した。職人は、市場経済に投げ出された。そこは生存競争の世界であった。これが、父と弘安の時代であった。弘安は、一九一七年に三〇歳で結婚し、同時に家業を継いだ。「母八僕を他に養子二呉れと云われたそうだ。今の僕の身の上では、他へ出る事は出来ない。両親は(兄が住む)名古屋へ行く事はいやと云われ、兄上は金沢へは帰られないとの事故、両親は期待する事は当然僕と定まる譯だ。僕は、以上の責任ある内は、他へは行かない」(大二・四・一七)⑦。

家長の弘安は、家の安泰を願った。それには二つの責任が伴った⑧。まず、兄と弟へ財産分与を行うこと。次に、生計を立てること。日記には、責任を覚悟する弘安の心情が綴られている。「昨年十月には父の発病に依りて、業務一切は僕の責任重く、引受せざるべからざるに至ル。且、十一月嫁を貰ひしによりて、此处ニ一家軸となる事となれり。勿論、財政も自ら心配せざるべからざる、僕の双肩には重荷が負されたのだ。そこで今後は、只管ニ家業を勵み一家を養ふと共に、兄への贈金、清二の分家又は養子等一切の処置、其他の重大なる幾多の事柄も一手ニ引受け、仕末せねばならぬ事となった。一手の外ニ味方なしと思ひ、勵むより外なしと覚悟せり」(六七・一・一)。これは、家を継いだ翌年(大正七年)の元旦である。そして一九二二(大正一一)年の元旦。「(前略)本年やりたき事は、清二の分家届をする事と其約束の金四百円を渡度事、其金は今手元ニはなき事故、農工銀行より借入れ、五年にて還す計畫なるも、当分清二より其半分を借りて之を利用して金を得ねばなるまい 其間五年は無利子たる事」。財産分与の問題は、容易に片がつかない。家を継いで、すでに五年が過ぎている。

弘安は、問屋や知人が注文する生活用具の装飾・修繕に励んだ。新たな商売も企画した。「僕か元日ニ北國新聞を見て思付し兎のツマミの『文鎮』を蠟で造って見た處、父は面白いから造らうと云ふ事なり、昼前ニ金岡方へ鑄造の豫算を聞ニ行く 餘り高價でもな可りし故、歸りて形を作る 下の臺は升の板にて小さき兎を鉛にて造り、夜父は直された 僕は夜、土にて柱掛の小さき丸形ニ波ニ兎を肉上にて造り見る」(大四・一・三)。忙しい時はしばしば夜業になった(日記の記載数四〇〇。実際はもっと多かったろう)。そんな時は日記を書く隙さえない。「二十五日より三十一日迄は、毎夜二時或は三四時、又は終夜仕事をなせし故、日記を書く暇とてもなく、只記憶ニ存するもののみを書き置仕だいなり」(六七・一二・二四)。仕事が多い大正期はまだよかった。大正末期には、仕事が減り始めた。弘

安は、それを自らの不甲斐なさと思い、諦めにも似た気持ちを日記に綴った。「吾等壮年期に二入れる者は、最も活動せねばならぬ 自分も三十六と云えど、獨立し得るや否や自分ながら、あやぶみ居れ共、周囲を眺むれば、両親は老境に二入れ共、樂に居くあたわず妻子も満足を、与へ得ぬ 自分の不甲斐なさは吾ながら、情なくなる仕だいなれ共、自分の全力を尽して至らぬは、又止むを得ぬ事とするより外なし」(大一一・一・一) ⑨。

作品を制作する

弘安は作家であった。生活用具の製作が多忙であっても、作品の制作を止めなかった。「夜松崎様指輪の文字彫違せし由、象眼して呉れと持つて来られた 明年より業務の方針変項する故指輪かんさし等の彫は出来ないから他へさせて呉さいとお断したが、大分不平らしかつたか仕方ない 今までは間二彫って上げしが此頃は仕事の澤山来て、之では目立つた仕事も出来ないからお断した次だい、今後は、置物、香炉のやうな品物を造たい考へだ」(大八・一・二・二九)。また家計が苦しくとも、作品の制作を止めなかった。「展覧会に出した作品が売れなかったら、それをまたどっかにもってっては売ってみたい。内田さんておいでて、そこの旦那がちよこちよこ買ってくれた」(娘信子の話。二〇〇九・四・一二)。顧客の作品の嗜好(美意識)は、時とともに変わる。ゆえに、技能の練磨に終りはなかった⑩。「現今の意匠圖案界は複雑をきわめて居る。其内二流行がある。吾々に流行に遅る事なく種々なる物を見それを参考として自分ノ思想を加へて新キジクを出さねばならぬ」(大二・一二・三)。「新キジク」を發揮するため、弘安の研究心は旺盛であった。展覧会を丹念に周り(日記の記載数三二三)、講習会に出かけ(同一一二)、図書館に通い(同一九五)、人の話に耳を傾け、実験を重ねた。「今日は清二が四分一を吹いた 僕も手傳をした 此間失敗こりて、人二聞もし又種々注意して吹きしに、以外の好成績を納めた 改良の要点は、湯を沸して熱湯の中二注き込む事、金の沸をギン味してさへ切る事、之には火を過分にする事、鍋茶碗の下二臺をして風か茶碗の下二あたるやうにする事等なり」(大七・六・六)。弘安は、謡曲や茶道の趣味を嗜んだ。しかし、それも遊びではなかった。弘安は、壁の掛軸や茶器を見て、美術意匠の目を養った。「いろいろ見る目を養うというね。ただ茶を飲むというだけでなくてね。だからお花も活けた。日記にも、こんな掛軸があがってたてよう書いとるもんね」(娘信子の話。二〇〇九・四・一二)。

しかし、展覧会の入選は容易ではなかった。「(工藝展に出した)僕の掛物も落選したから持ち帰る」(大一一・三・四)。作品の販売も容易ではなかった。「昨年東京三越の陳列會の不景氣(作品が売れなかったこと)の例もあれば、注文品を良とする事等、其他に心を配る必要あり 努力を要す」(大一一・一・一)。ゆえに作品が入選すれば、弘安は幸せであった。「(帝展で)入選の知らせを聞いたときア、さすがに嬉しかったでスネ。あっちこちの新聞社からきて、記事とっていったわいな」(田中、一九六八、五二頁)。作品は苦勞の結晶であった。ゆえに作品には愛着があった。「帝展の入選した作品が人手に渡って、手元に戻ってきた時は、それはもう喜んでね。別れた子ども帰ってきたような喜び方やった」(娘信子の話。二〇〇九・四・一二)。

二つの世界

このように弘安は、「家業を經營する」世界と「作品を制作する」世界に生きた。二つの世界は、次のよ

うに解釈され、対照される。まず家業経営は、家の安泰のために営利追求をめざす目的合理的な世界である。営利追求は、経済的行為であり、そこでは経営能力が求められる。弘安は、合理的経営を図った。弘安は、日記とは別に、日々の仕事の様子（代金、顧客名、仕事内容）を記載した大福帳を作った（途絶えた時期もあったが）。「仕事日記八別二作ラント思フ」（明四二・一・三一）。そこには、家計と経営の分離の萌芽が見られた。家業経営は、利の論理が支配する世界である。同時にそれは、家を守るという個別主義の世界である。家業経営の（中心的）担い手は、家長である。家長は、経営の困難を乗り切り、確実に利を得なければならない。こうして弘安は、家業を経営し、家を支えるため、寸暇を惜しんで働いた。「夜通の仕事で清二代つて貰ひ六時より八時迄二時間程寝て交々ニ香炉蓋を夕迄二磨上げ早速、川辺方へ金鍍金二持って行く」（大五・一〇・二一）。弘安は、勤勉の生活を実践した⑩。

これに対して、作品制作は、自己実現を求めて労働の意味を探究する価値合理的な世界である。意味の探究は、世事を超越した（広義の）宗教的行為である。そこでは創作能力が求められる。またそれは、審美主義が支配する世界である。さらに、優れた作品が他者の評価を得る普遍主義の世界である⑪。作品制作の担い手は作家である。作家には、美に鋭敏な想像力が求められる。作家は、意匠の工夫と技能の練磨に励み、想像力を鍛える。「午前九時半頃より僕は清二と美術工芸品展覧會出品物の研究ニ行く 新品物ニハ参考となるべきもの少なきが縣外出品及古美術品出品中ニハ参考品少なからず」（大五、一一・一）。また作家は、仕事の全過程を掌握する自由の人である⑫。ゆえに作家は、孤独な人でもあ

る。「金工というもんな、はじめから終りまで一人で仕事せんならん。孤独なもんでス」（田中、一九六八、五〇頁）。孤独は、完成した作品への他人の評価によって報われる。ここでも弘安は、勤勉の生活を実践した。

弘安は、近代的な時間感覚をもっていた。「夜、涼に出て、近衆の若連中と雑談して居たが、時間の空費をおしき感がしてならなかった。停車場を一廻りして帰る」（大ニ・七・一七）。弘安は、寸暇を惜しんで仕事をした。その勤勉は二つの機能をもった。一つ、家業の経営に励むという勤勉である。「吾等の活動は之よりだ 多忙なる年を今より如何ニ切抜けるかの計を立て置かねばならぬ 其内、僕の最も主な務めは清二の分家と清二の嫁取である 之には家産を三分にして父より分配せる事ニせねばならぬ 即ち我家の賣買登記は千二百円程にて三人ニ分くれは四百円となる 家は僕の持分に定まり居れば、僕は不動産を抵當として金を借り、漸次之を返済する大責任を負はねばならぬ」（大九・一・一）。二つ、作品の制作に励むという勤勉である。「遠藤様はいろいろ話なされた中ニ、職人は一生研究するものにて、多く見、多く聞く方よく、道具市などにはつとめて見るべし。よく見、よく腹に納むれば、暇より以上の徳あるなり。職人ニ限らず、自己の考にて一派を立つれば、これ程満足なし。なるべく自己の特長を發揮して、一寸人の出来ぬる作り出せと、又品物は人の長く見るものを造れと」（大ニ・二・二二）。

では二つの世界は、どんな関係にあったろうか。まず家業経営は、作品制作に対して双面的であった。作品制作は時間と資金を要した。それは、家業経営のためしばしば中断された。ゆえに家業経営は、作品制作を抑制した。他方で、家業経営による顧客の拡大は、作品制作の機会を広げた。経営能力は新たな仕事を創出した。ゆえに家業経営は、作品制作を促進した。次に作品制作も、家業経営に対して双面的であった。優れた作品の制作は、いい評価を得て、顧客拡大の機会を広げた。ゆえに作品制

作は、家業経営を助けた。「出品しなア、名ア通らんしネ」（田中、一九六八、五三頁）。他方で作品制作は、家計を圧迫した。作品制作は、家業経営の重石となった。「展覧会に出すものは作るのに暇要るでしょ。出して売ればいいんやが、売れんかったらね。その先の資本が要るから、だから土方に借りについて、伊藤（妻方の親族）から借りたり、材料費の工面にね」（娘信子の話。二〇〇九・四・一二）。しかも弘安は、しばしば作品の売値に無頓着であった。「直しもんをしてもね、簡単でいいからってお客さんが言われても、すごく丁寧に直すんや。そして直しもんやからって気兼ねして値段を言うわけ。だからお客さんの方がね、ほんなことないって（安すぎると）言うてまたお礼もってくる。するとお父さんは、余分にお金を戴いたからって、またなんか小さい作品をお礼に持っていく。そんながやった」（娘信子の話。二〇〇九・四・一二）^⑭。

家業経営と作品制作は、このような関係にあった。そしてその全体が、労働のエートスを構成した。それらは、たがいに異質な意味で、すなわち、家の安泰と自己実現というかたちで、弘安に働き甲斐を与えた。「ちよこつとでも足しにならんかと思うて、公園（兼六園）の中に商品陳列館っていうのがあったんやけど、そこで熨斗押えとか文鎮とか作って並べて、売れただけお金貰ってきた。それで毎年なんかかんか作ってた。小さいもんなら売れると」（娘信子の話、二〇〇九・四・一二）。他方弘安は、作品をわが分身のように思った。「できあがった品物は、こどもみたいな気がします。これだけは売るまいと思うのですが、けっきょくひとつずつ手放してしまいますよ。先日も古道具屋さんが、わたしの古い作品をもって来ましたが、家出していたムスコが帰ってきたようにうれしかったですね」（産経新聞地方版、昭三七・一二・五）。これが、弘安の労働のエートスであった。

4 解釈と議論

弘安の仕事に対する態度、すなわち、労働のエートスの構造を整理すると、図ようになる。それは、日記や文献中の弘安の語り、娘の語りから、まず、弘安の仕事に対する態度に関わる記述（語り）を抽出し、次に項目を立て、項目ごとに記述（語り）を選び分け、最後に、それらを説明する用語を添えて、全体を示したものである。それは、事実と解釈を往復して構成された一つの整理図である。

では、このようなエートスの構造は、どこまで一般化が可能だろうか。それは、職人や民衆に関する先行研究のどこに位置づくだろうか。ここでは先行研究として、近代日本の民衆の精神構造を説いた通俗道徳論と、職人の精神構造を説いた職人氣質論を取り上げる。そして、それらの議論を弘安のエートスの構造に重ね合わせる。しかしその前に、議論の骨組みをなす二つの鍵概念について、若干の説明を施しておく。

エートス

マックス・ヴェーバーは、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』において、プロテスタントの労働のエートスを分析し、エートスを「労働を天職（*Beruf*）と見、また、救いを確信しうるための最良の——ついにはしばしば唯一の——手段と考えることから生じる、あの心理的機動力」（Weber、訳一九九一、三六〇頁 傍点は原文）とした。またそれは、「個々人の生活態度に方向と基礎をあたえ」（Weber、

同、一四一頁)、「倫理的な色彩をもつ」(Weber、同、四五頁 傍点は原文)ものとした。すなわちヴェーバーは、エートスに二つの構成要素、すなわち理念と倫理を見た。本稿は、このヴェーバーのエートス概念を参考に、(文脈を離れた一般概念として)エートスを次のように解釈する。まずエートスは、人間の生きる意志そのものである。生の意志は二つの要素から成る。一つ、なぜ生きるか、すなわち生の意味(づけ)である。人間は生きる意味(目標)を得てはじめて、生きることができる。ここでこれを「理念」と呼ぶ。理念は、人間に生の意味を与える、エートスの内発的契機である。二つ、どう生きるか、すなわち生の決め方である。それは意味の実現の仕方である。ここでこれを「倫理」(道徳)と呼ぶ。倫理は、理念の実現の仕方を決める、エートスの外発的契機である。理念も倫理も、人間に内面化され、強い心理的機動力をもつ。倫理が理念を圧倒することもある。すなわち倫理の実践自体が、生きる目標として感得されることもある。とはいえ理念と倫理は、心理的機動力の起点を異にする。

このようなエートス解釈を弘安の労働世界に適用すると、次のようになる。家業経営と作品制作は、弘安が生きる二つの理念(生の意味)であった。弘安は、それらの理念の狭間で葛藤しながら、それらを両立させた。他方弘安は、二つの理念を「懸命に」追求した。弘安は、倫理(勤勉)の人であった。それが弘安の生の決め方であった。

勤勉

倫理の中心規範は「勤勉」(努力、専心)である。勤勉は、理念を確実に実現する方法である。しかし勤勉は、時代によって意味を異にする。前近代社会は、身分と役の体系から成る社会であった。人々は、世襲的に宛がわれた役を全うするために労働に勤しんだ。前近代社会では、生活は自己完結的であった。ゆえに人々は、規則的に流れる生活のリズムに合わせて働いた。職道を究めようと懸命に働く人はいた。没落を逃れようと懸命に働く人もいた。しかし、それらは特別な場合であった。前近代の人々は、基本的に、季節ごとに変わる日の出から日没までの時間(不定時法)をゆったりと働いた(西本、二〇〇六、一六六頁)⑮。これが前近代の勤勉であった。これに対して、近代社会は、資本主義の市場競争の社会であった。そこで生き抜くには、近代人は、勤勉たらざるをえなかった。近代社会は、労働(勤勉)を時間で測定する「時は金なり」の社会であった。ゆえに、勤勉には歯止めがなかった。また近代社会は、個人に自立を強制する社会であった。近代人は、自ら仕事を選択し、自らの裁量で働いた。ゆえに、仕事の成功・失敗は個人の責任とされた。勤勉(自立)は、つねに怠惰を生んだ。このような意味で、勤勉は、美德というより、自己や家が立ち行く必須の条件であった⑯。

通俗道徳

弘安は、高等小学校(および通信制の中学校)を優秀な成績で出た。弘安は、日記を書き、新聞(『北國新聞』と『報知新聞』)を読み、天下国家に関心を寄せる人であった。弘安は、大正期の庶民の中ではエリートであった。しかしそれでも、弘安は知識人や指導層ではなく、民衆(庶民)の一人であった。「僕は『学生』(雑誌) 昨年の分を一通り見た 其中で帝國圖書館長の日記の書方を再読す 大人物は他人が書いて呉れるか吾々の歴史は自分でつけねばならぬ 後年、参考二なる事この上なしとあり 猶々繼續して記さんと決す」(大三・一・六)。米澤日記は、民衆が残した日記として希少な価値をもつ。

近代日本の民衆の勤勉を強調した理論に、安丸良夫の通俗道德論がある。通俗道德とは、儒教や心学（や民衆宗教）に発する生活道德（勤勉・儉約・正直・孝行・和合）をいう（安丸、一九七四、一〇頁）。近世から近代に至る商品経済の中で、民衆は、家の没落の危機に瀕した。また欲求が膨張して、生活が荒廃していた。知識人や支配層は、このような民衆を通俗道德によって教化しようと、民衆に「禁欲的生活規律」（安丸、一九六五、一三頁）を説いた。他方民衆は、自己形成・自己鍛錬に励み、生活態度を変革した。その過程で民衆は、「龐大な社会的人間的エネルギー」（安丸、一九七四、九頁）を発揮した。そのエネルギーが、「日本近代化の原動力（生産力の人間基礎）」（安丸、同、同頁）となった。このように安丸は、歴史変革期において『眠っていた』民衆の魂の奥底を揺り動かして、人間の無限な可能性をよびさます（安丸、同、同頁）通俗道德の力を強調した^⑦。

このような安丸の通俗道德論は、民衆の勤勉を歴史（近代化の人間的基礎）に位置づけ、深めたものとして説得的である。安丸の考えを本稿に当て嵌めると、次のようになる。（民衆）弘安は、「家の安泰」という理念を実現するために、家業経営に勤しんだ（勤勉）。「家の安泰」は、世俗的な目標であったにせよ、弘安に生きる意味を与えるに十分な理念であった。弘安の生きる意志は、そのような生きる意味の希求と、そのための勤勉という生活態度の双方から発したものである。ただし安丸の議論は、後者、すなわちエトスの外発的契機としての倫理（通俗道德）の強調に傾斜している。「道德は、けっして手段ではなく、それ自体が至高の目的・価値なのであるが、ただその結果としてかならず富や幸福がえられる」（安丸、一九七四、六頁 傍点は原文）。それは、「道德と功利的目的との接合・癒着」（安丸、一九六五、三頁）したものである。本稿はこれを転倒する。民衆は、かならず「富や幸福」が得られると信じたからこそ道德を実践した。すなわち民衆は、「富や幸福」という（功利的）理念（エトスの内発的契機）を実現するために、道德（エトスの外発的契機）を実践した。理念あつての倫理であつた^⑧。

職人氣質論

民衆の労働のエトスを説く説に、もう一つ職人氣質論がある。職人は、職祖神を信仰し、道具や素材と精神的な繋がりをもった。「鉄と親しくなると、鉄が硬く冷たいものではなく、鉄はやわらかくて、まるで命を宿したもののごとく身近な存在に変わるのである」（小関、二〇〇三、五〇頁）。制作された作品は、職人の自己実現の証しとなった。「この（働き甲斐の）要求は、自分の仕事への『かけがえのなさ』の確認の要請であり、自己実現の機会探求の宣言でもある」（尾高、一九九三、二九〇頁）。作品には強い愛着が籠められた。「職人はしばしば、自信作ほどわが子と同じで、手離したくないような愛着を口にする」（小関、同、一九九頁）。こうして職人にとって、仕事は人生そのものとなった。仕事と余暇の境界は溶解した（遠藤、一九八五、四二頁）。職人氣質論においては、「ものに魂が宿る」というアニミスティックな宗教観や、職人道として遵守すべき職業倫理、作品の出来に陶醉する達成感が強調された。そのような職人精神は、内発的な労働のエトスとしてあつた。職人には技能向上への旺盛な動機があつた。職人は、ひたすら作品制作に没頭した。「こんなことでいいのかと、自分の技能を疑い、自分の技能を恥じることができる者だけが、次のステップに進むことが許される」（小関、二〇〇五、八九頁）。また、職人の労働は自由な世界にあつた。職人は、仕事の方法に「大幅の自主裁量権」（尾高、一九九三、一八頁）をもち、その職業能力は、「自己完結的」（尾高、同、同頁）であつた。ゆえに職人は、作品

制作に没頭することができた。「職人的労働の世界は、職場の自主管理の世界でもあった。商品（作品）のデザイン、設計、作業（生産）計画、等々についての決定権は職人自身がこれを握り、作業者（職人）は、自己の仕事の出来栄によってその仲間と腕を競いあうことができた」（尾高、同、二七三頁）。このような職人氣質論を本稿の論旨に当て嵌めると、次のようになる。（職人）弘安は、いい仕事をして自己実現を達成するために、研究を重ね、技術の練磨に励んだ（勤勉）。それは、普遍的な美の探究の世界であった。しかし美は、他者の評価によって定まる。美の尺度は、時代とともに変わる。ゆえに、弘安の美の探究には到達点がなかった。作品の評価を得て自己実現したいという願いは、弘安に内発的な生きる意味を与えた。

両論の接合

こうして議論は、本稿の趣旨に則り、次のようになる。通俗道德論と職人氣質論が展開する世界は、弘安のエートスを構成する二つの理念に照応する。弘安も、家の没落を免れるために家業経営に励む通俗道德の実践者であった（弘安の場合、その態度は儒教や心学に明確な基礎を置くものではなかったが）。同時に弘安は、家の没落の危険を侵して、時間と資金を要する作品制作に励んだ（他面でそれは、顧客を開拓し、家業経営に資するものであったが）。弘安の勤勉な生活態度は、これらの理念の実現を図る意志の表れであった。このような意味で、弘安のエートスは、通俗道德論と職人氣質論が適用可能な一事例とみることができる。換言すれば、弘安のエートスの構造を舞台に、通俗道德論と職人氣質論を職人エートス論として統合することができる。家の没落を免れるために働き、同時に、家の没落の危険を承知で美の世界に没頭する。家長＝作家である弘安は、矛盾する理念双方の実現に専心した。そしてそれら全体（二つの理念と勤勉）が、弘安のエートスを構成した。

今後の課題

筆者の究極の関心は、日本近代の労働のエートスにある。それは、日本資本主義の〈精神〉や日本近代化の問題に至る一里塚である。勤勉を軸に日本の近代化を論じる説は、通俗道德論の他にもある。イエの論理から日本の近代化を説く論もある^⑩。本稿は、一職人のエートスの構造を分析し、それに通俗道德論、職人氣質論を重ね合わせたに止まる。日本近代の労働のエートスに到達するには、先行理論の検討と同時に、実証研究を重ねられなければならない。本稿に続く研究は、次の手順を踏むことになる。一つ、「職人のエートス」類型を構築することである。職人は、工程（一貫作業か分業か）、形態（居職か出職か）、経営（家内工業か問屋・工場雇いか）等によって分類される。労働に向き合う態度は、厳密には、それら分類ごとに異なる。弘安は居職の職人であった。居職は、仕事の場が固定し、労働と生活のリズムを律することができた。「未明大雨アリ 起テ見ル 雨漏ノ處一ヶ所アリ 直二日科ノ冷水摩擦ヲヤツテ仕事ヲシタ」（明四四・九・一五）。弘安が長期に亘り日記を書くことができた条件の一つも、そこにあった。本稿で整理したエートスの構造が他の職人にどこまで妥当するのか。その検証の上で、職人のエートス類型が構築されなければならない。

二つ、職人のエートス類型を職工や労働者の、次いで農民や商人のそれと比較することである。そして、それらの類似と差異を明らかにし、全体を含む「日本人のエートス類型」を構築することである。安丸の通俗道德論は、農民を主体とする労働のエートス論であった。農民の関心は、二つの世界（家の世界と

美の世界)の葛藤にある職人より、家の世界に近かった(と思われる)。商人は、職人の対極にあった(と思われる)。市場競争に生きる商人は、つねに浮沈の淵にあった。多くの商家には、勤勉、儉約、正直、和合を説く家訓があった(山本、二〇〇五)。それらの徳目は、倫理に止まらず、商売自体を支える目標であった。内面の美に生きる職人と物の売買に生きる商人。両者の、生きる意味を実現する回路は異なった(はずである)。「商人ノ習慣カハ知らネド、中々食ヘナイモノニテ、錢ダタキ付ルヤウナ事ヲ云フ 値段ガ合ヌカラ、父ト相談シテ呉サレトテ、金ヲ受取ラザリキ」(明四四・七・一四)。このような弘安の商人への異和感は、エートスの差異に発するものである。要するに話はこうなる。職人や職工、労働者、農民、商人はみな、多かれ少なかれ、二つの世界を合わせもっていた。その上で、職人は精神の世界に近く、商人は営利の世界に近かった。職工や労働者、農民は、これらの間のどこかにあった(前掲図を見られたい)。

三つ、近代日本のエートスを、一方で時間軸(前近代や現代)で比較して、その位置を定め、他方で空間軸(西欧やアジア)で比較して、その位置を定めることである。それらを行って、「近代日本」のエートス研究が完遂することになる。しかし、それはマクロな比較類型論であり、そのためには別途の議論が必要となる。

[注]

- ①兄が家を出たため、旧民法の建前上、弘安が両親の家から分家し、そこへ両親が同居するかたちをとる。財産は土地と家屋で、その資産価額を兄・弘安・弟清二に三等分し、兄と弟の分を金で渡す方法をとる。その金を弘安が調達することとなる。
- ②『米澤弘安日記』は、一九〇六年～一九七二年に書かれ、四〇〇字詰原稿用紙で四三三六枚に及んだ(米澤、二〇〇〇～〇三)。その大部分は、弘安の仕事がもっとも充実した大正期に書かれた。以下、米澤日記の引用は(年・月・日)と記す。年は元号で表わし、明治を明、大正を大、昭和を昭と略す。田中喜男は、生前の弘安と妻芳野に面接し、その語りを著書(田中、一九六八、一九七四)に採録した。筆者も、弘安の娘信子に面接を行った。本稿ではこれらのデータも使用する。用語等は原文のママである。引用文中の丸括弧は筆者の注記である。本稿における日記分析の方法については、(古屋野・青木、一九九五)を見られたい。
- ③金沢の象嵌職人は、昭和に入って減り続け、昭和一四年に一四人、その他の金工を入れても二〇人余り、太平洋戦争中に金工に止まった者は一、二人であった(田中、一九七四、一六六頁)。
- ④横山源之助は、「こじき」や行旅病人を都市下層の最下層となし、そこに放蕩の末身を崩した職人が含まれるとした(横山、一九四九、三三～三四頁)。もちろん零落した原因は、放蕩などではなく市場競争からの脱落であった。
- ⑤象嵌仕事は、父(元気な頃)、弘安、清二で行い、一時期弟子をとった。妻は、注文の開拓、資金の工面から作品の批評まで行い、弘安を支えた。
- ⑥大正七年の米騒動の前後、弘安は米価の変動を日記に綴った。「米價ハ中々下らない」(大七・五・二)、「白米小賣値段、金沢一舛四十錢ニ暴騰シ 翌日は一円二舛となった 何処迄上るや知れず」(大七・八・三)、「米價は四十五錢ニ騰り、下級民は堪えられなくなった」(大七・八・一

- 二) 等。家計に不安を抱く弘安は、米価の高騰を案じる民衆の心情とともにあった。
- ⑦弘安は、自らの結婚も家を中心に考えた。「本日内儀様来られ、娘様はまだ嫁入定まらぬ由なれば、見たければ、見られる都合二して上げましょうとの事であった。年八二十の内、僕は曰く、同娘様二逢ひし事あるが、月給取向にて、職人二八不適當と思ふと」(大六・四・一三)。
- ⑧弘安は、もともと責任感が強かった。ある日、弘安は、弟の放蕩(廓遊び)を諫めた。「清二は此間遊興費、今日先方へやる約束との事 色々問答の末、寛容にして十円貸した 重々説諭やれた これで改心せねばよくよく駄目な奴だ」(大二・五・二二)。弘安は、家の没落の怖さを知っていた。「松崎様か火事見舞の返禮二来られた 乞食同様二なつたと、ぐちを云って居られた 無理もない新聞紙を百枚程あげた」(大三・五・二)。
- ⑨昭和に入り仕事が激減したが、弘安はそのことを日記に書かなかった。妻が裁縫で生計を支えたことも書かなかった(水越、二〇〇七、二四頁)。それどころか、次第に日記自体を書かなくなった。弘安にとって、日記は仕事(「本来の」生活)とともにあった。
- ⑩伝来の象嵌技術に頼ってでは、遅れをとるだけであった。そこには、近代的なデザインを駆使した美術工芸品が高い評価を得るといふ、当時の美術工芸界の事情があった(丸山、二〇〇四、九六頁)。
- ⑪弘安は、家の平安を守る近隣の人々と和し、仕事を調達し、製品・作品を販売するために同業者や顧客と和さなければならなかった。家長弘安には、和合も重要な倫理徳目であった(青木、二〇〇六、一八二頁)。
- ⑫内国勸業博覧会や(その後の)帝展への出品とその評価は、当時の美術関係者の評価基準とされた(丸山、二〇〇四、九七頁)。「他人から賞賛されることは、名誉を得ることであり、この名誉が『労働の喜び』の内容になる。だからこそ、他人の賞賛または名誉を獲得するために、職人たちは互いに競争し、せりあう。他の職人よりも高い地位を得ようとし欲望しつつ労働する」(今村、一九九八、一三〇～一三一頁)。それはまるごと、弘安の世界であった。
- ⑬「職人の場合には、農民や商人と異なり、家意識も薄い事も手伝って、仕事上の集団主義も発達しにくかった」(間、一九八七、一六三頁)。作品制作に没頭する時、弘安は自分だけの世界にいた。他者(家族)は、その世界に立ち入ることはできなかった。
- ⑭弘安は、昭和三年・四年と帝展に連続入選を果たしたが、その後帝展へ出品していない。それは、作品制作に要する資金の圧迫のためと思われる(丸山、二〇〇四、九九頁)。
- ⑮日本人の働き方について、次のような記述がある。「(明治期に日本を訪れた)ワーグマンの作品に、『工作中的日本人』と題するスケッチがある。職人が地面に腰を下ろして煙草をふかし、くつろいで談笑している。日本人には仕事と休憩時間の区別もついていない、と皮肉たっぷりにいいかげである」(西本、二〇〇六、五八頁)。ゆったりと働く日本人は今もいる。たとえば、(筆者が研究する)釜ヶ崎の日雇労働者の世界では、「働きすぎない」ことが労働現場の約束となっている。それは、集団規範(他人を出し抜かない)としてそうであるばかりではない。彼らは、自らを勤勉な(真面目な)「働き人(ド)」と思っている。そこでは、勤勉の意味がずれている。
- ⑯いい仕事をして自己実現を達成したいという動機は、前近代の職人ももったであろう。しかしここで重要な点は、その動機が、市場経済によって煽られているという事実である。いい仕事かどうかは、市場に

おける他者の評価（作品の価格）によって決まる。

- ⑰ 通俗道徳の実践は、民衆に一定の生活向上をもたらした。そのことは、民衆の間に、貧困の客観的条件から目を逸らす「自己責任の論理」（安丸、一九七四、五〇頁）を生んだ。そして「貧しい人々は、経済的な劣敗者であるだけでなく精神的な劣敗者でもある、という幻想 貧困と不幸はみずからの罪によるという罪障観」（安丸、一九六八、三八頁）とする倒錯した観念を生んだ。他方、通俗道徳は、それが民衆に「主体的に」自覚され、支配層の生活態度に向けられる時、支配者の私欲を批判し、支配者に世間の常識的な規範を守らせようと強いる社会変革の力となった。それが、打ち毀しや一揆の正当化の論拠となった（安丸、一九七四、七四～七六頁）。
- ⑱ 釜ヶ崎の日雇労働者は、仕事に思いを抱いている。彼らは、しばしば次のように言う。「わいらはビルも道路も作ってきたんや。ようがんばって、ええ仕事してきたんや。わいらは社会の貢献者や。アンコ（日雇い）やゆうてなめたらあかんで」。このような思いこそ、彼らの働き甲斐であり、労働の意味（理念）である。だからこそ彼らは、夏は猛暑の、冬は酷寒の厳しい労働に耐えることができる。
- ⑲ 小倉充夫は、儒教道徳に発する労働への内的機動力に、資本主義の〈精神〉との「機能的な等価物」を見た（小倉、一九七四、一一頁）。これは安丸と同じ論理である。小笠原真は、日本のイコの（本家を一子にだけ継承させて財産の分散を防ぎ、家の経営に優れた者なら非血縁者でも後継ぎにするという）経営合理性が、プロテスタンティズムの倫理と同等の機能をもったとした（小笠原、一九九四、一七二頁）。これらの「日本資本主義の精神」論が、どこまで現実と整合性をもつものであるか。さらに今後の実証研究を待たなければならない。

【文献】

- 青木秀男、二〇〇六、「近代民衆における自立の構造——加賀象嵌職人の場合」日本社会学会『社会学評論』五七巻一号、一七四～一八九頁。
- 遠藤元男、一九八五、『職人と生活文化』雄山閣出版。
- 間宏、一九八七、「日本人の仕事意識の歴史」三隅二不二編『働くことの意味』有斐閣、一四五～一九八頁。
- 今村仁司、一九九八、『近代の労働観』岩波書店。
- 古屋野正伍・青木秀男、一九九五、「日記分析における『個人対歴史』の間——金沢・象嵌細工職人の生活史研究の場合」常磐大学大学院人間科学研究科『人間科学論究』三号 六五～七六頁。
- 丸山敦、二〇〇四、「近代伝統工芸職人の地位確立と情報環境——加賀象嵌・米沢弘安の苦闘」放送大学情報化社会研究会『情報化社会・メディア研究』一卷 九〇～一〇〇頁。
- 水越紀子、二〇〇七、「近代の職人家族における夫と妻——夫の日記に書かれた『妻の行為』の分析を通して」大阪市立大学人権問題研究センター『人権問題研究』七号、二三～三八頁。
- 西本郁子、二〇〇六、『時間意識の近代——「時は金なり」の社会史』法政大学出版会。
- 小笠原真、一九九四、『近代化と宗教——マックス・ウェーバーと日本』世界思想社。
- 小倉充夫、一九七四、『資本主義の精神』論と社会主義の精神——社会変革と民衆の生活態度 関する比較社会学的一考察」日本社会学会『社会学評論』二五巻一号、二～一七頁。

- 小関智弘、二〇〇三、『職人学』講談社。
——、二〇〇五、『職人力』講談社。
- 尾高煌之助、一九九三、『職人の世界・工場の世界』リポート。
- 隅谷三喜男、一九五五、『日本賃労働史論——明治前期における労働者階級の形成』東京大学出版会。
- 田中喜男、一九六八、『百万石の職人——現代に生きるその精神』北国書林。
——、一九七四、『加賀象嵌職人——米沢弘安の人と作品』北国出版社。
- 横山源之助、一八九九、『日本之下層社会』教文館（一九四九『日本の下層社会』岩波書店）。
- Weber, Max, 1920, *Die Protestantische Ethik und Der »Geist« Des Kapitalismus. Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie*, 大塚久雄訳、一九九一、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店。
- 山本眞功、二〇〇五、『商家の家訓——商いの知恵と掟』青春出版社。
- 安丸良夫、一九六五、「日本の近代化と民衆思想」（上）日本史研究会『日本史研究』七八号、創元社、一～一九頁。
- 安丸良夫、一九六八、「近代化過程における民衆道徳とイデオロギー編成」歴史学研究会『歴史学研究』三四一号、青木書店、三二～四五頁。
- 安丸良夫、一九七四、『日本の近代化と民衆思想』青木書店。
- 米沢弘安日記編纂委員会編『米沢弘安日記』上巻二〇〇一、中巻二〇〇二、下巻二〇〇〇、別巻二〇〇三、大学教育出版。